

科目分類	専門科目 国際関係	対象学年	2・3・4
授業科目	国際機構論	学期	前期集中
担当教員	非常勤講師 庄司克宏	選択／必修	選択
科目コード	H033020 授業形態 講義	単位数	2

授業の概要

政府間国際機構についての基礎を踏まえた後、EUの機構および活動を概観し、普遍的国際機構（例えば、安全保障について国連、通商についてWTO、通貨についてIMF、開発援助について世界銀行、難民問題についてUNHCRなど）をとりあげてEUと比較する。また、アジアにおける地域統合の可能性についてもふれる。補完性原則により、EUでは国家との関係だけでなく、地方自治体との関係も重視されている。その点を日本政府と島根県の関係に投影して比較検討することも行いたい。

質疑応答による双方向型授業を行う。

【到達目標】

グローバル化に伴い、国際社会における国家間の関係が緊密になるにつれて、どのような現象が生じ、いかなる対応が必要となるかについて、EUの先駆的な試みを他の国際機構と比較しつつ参考にしなが、自ら考えることができるようになること。

授業の内容

第1回 授業の全体にわたる問題提起として、国際社会における国際機構の役割と限界について考える。

第2回 国際機構の基礎知識として、定義、分類、歴史、組織、意思決定について学習する。

第3回 地域統合の基礎知識として、欧州を事例に、歴史、組織、意思決定について学習する。

第4回 国際機構の活動(1):安全保障① 国連が普遍的国際機構として国際安全保障にどのように貢献し、いかなる限界があるのかを考える。

第5回 国際機構の活動(2):安全保障② 地域的国際機構としてNATOとEUを取り上げ、安全保障上の役割の相違について考える。

第6回 国際機構の活動(3):通商① WTOが普遍的国際機構として通商の自由化にどのように貢献し、いかなる限界があるのかを考える。

第7回 国際機構の活動(4):通商② 地域的国際機構としてEUとASEANを取り上げ、通商の自由化における役割の相違について考える。

第8回 国際機構の活動(5):通貨・金融① IMFが普遍的国際機構として通貨・金融の分野でどのように貢献し、いかなる限界があるのかを考える。

第9回 国際機構の活動(6):通貨・金融② 地域的国際機構としてのEUに設置されている欧州中央銀行(ECB)を取り上げ、どのように金融政策を行っているのかについて考える。

第10回 国際機構の活動(7):開発援助① 国連と世界銀行が普遍的国際機構として開発援助の分野でどのように貢献し、いかなる限界があるのかを考える。

第11回 国際機構の活動(8):開発援助② 地域的国際機構としてのEUがどのように開発援助を行っているのかについて考える。

第12回 国際機構の活動(9):人権① 国連が普遍的国際機構として人権分野でどのように貢献し、いかなる限界があるのかを考える。

第13回 国際機構の活動(10):人権② 地域的国際機構としての欧州審議会(および欧州人権裁判所)とEUが人権保護にどのように取り組んでいるのかについて考える。

第14回 事例研究:補完性原則に基づき、EU、国家、地方自治体の関係から日本政府と島根県の関係について考える。

第15回 結論:国際機構の未来と国家の在り方

テキスト

庄司克宏著『欧州連合 統治の論理とゆくえ』岩波新書、2007年(定価777円)
 ☆刊行以来、数回大幅加筆しているため、最新改訂版の2016年7月第10刷を入手すること。毎回授業で参照し、小テストにも使用するので、最初の授業から必ず持参すること。

参考文献

参考書: 庄司克宏編『国際機構』岩波書店、2006年

評価方法

成績評価は、下記(イ)と(ロ)の合計点による。レポートなし。

(イ) 授業での小テスト(教科書とノート持込可) 4~8回(計60点)
 (ロ) 最終回に教科書の内容に関する試験(教科書のみ持込可)(40点)を行う。

その他

楽しい授業にしたい。
 ※1
 ※2

科目分類	専門科目 国際関係	対象学年	2・3・4
授業科目	北東アジア関係概論	学期	後期授業
担当教員	井上 治	選択／必修	選択
科目コード	H033040	授業形態	講義
		単位数	2

授業の概要	<p>北東アジア地域の中国、朝鮮半島(韓国・北朝鮮)、モンゴル、ロシア(極東地方)、かつて日本が中国の東北地方にたてた傀儡政権「満洲国」について、①それぞれの地域の近代を知る上で重要となる事柄、②近現代の日本との関係を示す事柄について学び、近現代北東アジア諸地域の関係とその構造的性を理解する。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・北東アジア地域の近代史の大きな流れを理解し説明できる。 ・授業で説明する北東アジア地域の現状を理解する上で重要となる事柄について説明し、それについて自己の見解をもつことができる。
-------	---

授業の内容	<p>上記計画通り。 (北東)アジアと島根県人の交流についてゲストを招いて講義してもらうことも考えている。</p> <p>第1回 インタロクダクション:授業のねらい(島根県立大学において北東アジア地域を重要視する理由など)、進行方法、評価について説明する。 第2回 中国①－華夷秩序－ 第3回 中国②－多民族国家－ 第4回 朝鮮半島①－朝鮮王朝から「大韓帝国」 第5回 朝鮮半島②－「大韓帝国」から大韓民国 第6回 朝鮮半島③－北朝鮮の建国 第7回 朝鮮半島④－北朝鮮の自主路線 第8回 「満洲国」① 第9回 「満洲国」② 第10回 ロシア極東①－ロシアの東進 第11回 ロシア極東②－原住民と森林資源 第12回 モンゴル①－近代北東アジア国際関係の核として 第13回 モンゴル②－その南北関係 第14回 中央アジア・新疆・チベット・台湾のいずれかを題材に講義 第15回 予備日</p>
-------	---

テキスト	特定のテキストは用いない。
------	---------------

参考文献	<p>【全般】</p> <p>衛藤瀧吉『近代東アジア国際関係史』東京大学出版会、2004年 下斗米伸夫『アジア冷戦史』(中公新書)中央公論新社、2004年 川島真・服部龍二『東アジア国際政治史』名古屋大学出版会、2007年</p> <p>【中国】</p> <p>浜下武志『朝貢システムと近代アジア』岩波書店、1997年 毛里和子『周縁からの中国:民族問題と国家』東京大学出版会、1998年 毛里和子『中華世界』(現代中国の構造変動7)東京大学出版会、2001年 王柯『多民族国家中国』(岩波新書)岩波書店、2005年 王柯『20世紀中国の国家建設と「民族」』東京大学出版会、2006年 平野聡『大清帝国と中華の混迷』(興亡の世界史 第17巻)講談社、2007年</p> <p>【朝鮮半島】</p> <p>糟谷憲一『朝鮮の近代』(世界史リブレット43)山川出版社、1996年</p>
------	---

<p>ドン・オーバードファー『二つのコリア(特別最新版):国際政治の中の朝鮮半島』共同通信社、2002年 下斗米伸夫『モスクワと金日成:冷戦の中の北朝鮮1945-1961年』岩波書店、2006年 文京洙『韓国現代史』(岩波新書)岩波書店、2005年</p> <p>【「満洲国」】</p> <p>山室信一『キメラ(増補版):満洲国の肖像』(中公新書)中央公論新社、2004年 小林英夫『満洲の歴史』(講談社現代新書)講談社、2008年</p> <p>【モンゴル】</p> <p>小松久男『中央ユーラシア史』(新版世界各国史4)山川出版社、2000年 生駒雅則『モンゴル民族の近現代史』(ユーラシア・ブックレット no.69)東洋書店、2004年 モリス・ロッサビ『現代モンゴル:迷走するグローバルゼーション』(明石ライブラリー112)明石書店、2007年</p> <p>【ロシア極東】</p> <p>三上次男『東北アジアの民族と歴史』(民族の世界史3)山川出版社、1989年 ジェームス・フォーシス『シベリア先住民の歴史:ロシアの北方アジア植民地』彩流社、1998年 菊間満・林田光祐『ロシア極東の森林と日本』(ユーラシア・ブックレット no.58)東洋書店、2004年</p> <p>【中央アジア・新疆・チベット】</p> <p>小松久男『中央ユーラシア史』(新版世界各国史4)山川出版社、2000年 岩崎一郎『現代中央アジア論:変貌する政治・経済の深層』日本評論社、2004年 大西広『チベット問題とは何か:“現場”からの中国少数民族問題』かもがわ出版、2008年</p>
--

評価方法	<p>出席日数(50%) 最終テストあるいはレポートの成績(50%)</p>
------	---

その他	<p>※1 ※2</p>
-----	-------------------

科目分類	専門科目 国際関係	対象学年	3・4
授業科目	日中関係論	学期	後期授業
担当教員	江口 伸吾	選択／必修	選択
科目コード	H033050	授業形態	講義
		単位数	2

授業の概要	<p>本講義では、現在に至る日中関係の歴史的展開を跡付け、今後の日中関係の行方を分析するための基礎的知識を提示する。</p> <p>日中関係をみると、その歴史は長く、友好と敵対が交錯する複雑な過程を経てきたことがわかる。また、隣国同士であるという相互の地理的環境から、両国関係を客観的に捉えることが困難な状況にもある。このような状況のなかで、両国関係の未来を構想するためには、歴史的知識と社会科学的方法論に基づいた冷静な考察が何よりも求められるであろう。</p> <p>本講義では、以上の問題関心から、日中関係の歴史的展開を跡付けることによって、現在の諸問題を考察するための幅広い視野と両国関係をより客観的に分析する方法を考察する。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日中関係の基礎的知識を習得することができる。 ・日中関係の現状を理解するとともに、課題の所在を把握し、歴史的パースペクティヴと社会科学的方法論から分析することができる。
-------	--

授業の内容	<p>第1回 インTRODクシヨンー日中関係論の内容紹介</p> <p>第2回 日中関係への見方をめぐって</p> <p>第3回 日中関係史の起源ー近代以前の両国関係</p> <p>第4回 開国過程における日中両国の異同ー近代以降の両国関係</p> <p>第5回 日清戦争と相互関係の逆転</p> <p>第6回 敵対構造の形成</p> <p>第7回 日中戦争とその拡大</p> <p>第8回 戦争の帰結と東アジア国際政治の再編</p> <p>第9回 戦後の日中関係ー冷戦構造のなかでー</p> <p>第10回 日中国交正常化の諸相ー東アジア国際政治秩序の転換点にあたって</p> <p>第11回 現在の課題とその要因(1)</p> <p>第12回 現在の課題とその要因(2)</p> <p>第13回 現在の課題とその要因(3)</p> <p>第14回 現在の課題とその要因(4)</p> <p>第15回 まとめ</p>
-------	---

テキスト	特に指定しないが、下記の参考文献を参照してほしい。
------	---------------------------

参考文献	<p>(1)参考文献</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高原明生・服部龍二編『日中関係史1972-2012 I 政治』(東京大学出版会、2012年) ・中園和仁編著『Minervaグローバル・スタディーズ3／中国がつくる国際秩序』(ミネルヴァ書房、2013年) <p>(2)講義の内容を良く理解するために、下記の書籍も参照してほしい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・井上寿一編『日本の外交』第1巻(岩波書店、2013年) ・宇野重昭・唐燕霞編『転機に立つ日中関係とアメリカ』(国際書院、2008年) ・宇野重昭・江口伸吾・李曉東編『中国式発展の独自性と普遍性ー「中国模式」の提起をめぐってー』(国際書院、2016年) ・川島真編『シリーズ日本の安全保障5／チャイナ・リスク』(岩波書店、2015年) ・川島真・服部龍二編『東アジア国際政治史』(名古屋大学出版会、2011年再版)
------	--

	<ul style="list-style-type: none"> ・国分良成・添谷芳秀・高原明生・川島真『日中関係史』(有斐閣、2013年) ・高原明生・前田宏子『シリーズ中国近現代史5／開発主義の時代へ1972-2014』(岩波書店、2014年) ・三谷博他編『東アジア歴史対話——国境と世代を越えて』(東京大学出版会、2007年)
--	--

評価方法	成績評価は、出席・レポート(40%)、期末試験(60%)の実施を通して、総合的に評価を行います。
------	--

その他	<p>特になし。</p> <p>※1</p> <p>※2</p>
-----	----------------------------------

科目分類	専門科目 国際関係科目	対象学年	3・4
授業科目	日本朝鮮半島交流史	学期	後期授業
担当教員	石田 徹	選択／必修	
科目コード	H033060	授業形態	講義
		単位数	2

授業の概要	<p>今年度の本講義では、主に幕末維新期から韓国併合期にかけての日本と朝鮮／韓国との関係の中に見いだせる「外交秩序・外交思想」に焦点を当て、この時期の日朝両国がどのような考えをもとにお互いの関係を作っていたのかを考えてみたい。</p> <p>現在の日本と韓国(さらには中国)との間では「歴史認識」が問題視されるようになって久しいが、この問題はどのように解決することができるだろうか。さらに言えば「この問題の解決」とはどういう状態を指しているのだろうか。</p> <p>少なくとも、日本と韓国(歴史的には朝鮮、さらには中国)が歴史上どのような関係を持ってきたのかを知ること、 「歴史認識」問題を解きほぐす上で必要な手順と良い。もし、その過程で、現在の韓国(さらには中国)の「反日」のそもそもの原因についてもある程度の理解ができるのであれば、より望ましいことだろう。</p> <p>なお、授業計画は進捗などに応じて随時変更する。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在日韓両国に横たわっている「嫌韓／反日」感情に囚われずに、日韓(日朝)関係を見据える“土台”を自分自身の中に作り上げる。 ・19世紀後半以降の日本が朝鮮(当時)や中国とどのような関係を構築してきたのか、その内容を理解する。 ・19世紀中盤から20世紀初頭にかけての日本と朝鮮との政治的・外交的関係を複数の視点から説明できる。
-------	---

授業の内容	<p>第1回 ガイダンス・諸注意</p> <p>第2回 2つの外交秩序 万国公法秩序と華夷秩序</p> <p>◆近代の日朝(日韓)関係を考える上で見落とすことのできない大前提である2つの「外交秩序」について考察します。どちらの内容も、受講者は他の講義(たとえば北東アジア関係概論、国際関係概論など)で触れられるので、復習をかねて、きちんと理解すること。</p> <p>第3回 対馬と朝鮮</p> <p>◆近代に限らず、日本と朝鮮半島との交流を考えたとときに無視できないのが「対馬」の存在です。対馬と朝鮮との関わりについて考察します。</p> <p>第4回 Western Impact (西洋／西欧の衝撃)</p> <p>◆日本の場合、1853(嘉永6)年、ペリー艦隊が浦賀に来航して、社会全体が大きく揺らいでいきます。中国の場合は一足早く1840年のアヘン戦争です。同時代的に、東アジアの国々は「衝撃」を受けました。その状況を考察します。ところで、朝鮮にとつての「衝撃」はどのようにしてもたらされたのでしょうか。</p> <p>第5回 日朝関係の刷新1 幕末の朝鮮政策</p> <p>◆西洋の衝撃を受ける頃からの日本における対外政策のうち、朝鮮に対する政策はどのように展開していたのかを検討します。</p> <p>第6回 日朝関係の刷新2 明治維新期の朝鮮政策</p> <p>◆徳川政権が倒れ、新たに天皇親政・「明治政府」が樹立されてからの日本の朝鮮政策を検討します。この時期の日朝関係は、外交交渉が停頓し、言わば「最悪」の状態でしたが、なぜこのような状態になったのでしょうか。</p> <p>第7回 日朝関係の刷新3 開港期の日本政策</p> <p>◆日本における「幕末維新期」と同じ時期の朝鮮半島は、現在韓国では一般に「開港期」と呼ばれています。この時期の朝鮮は日本に対してどのような態度で臨んでいたのかを検討します。</p> <p>第8回 「征韓論」をめぐって</p> <p>◆明治初期、もつといえ幕末から、日本では「征韓論」なる議論が登場していました。これらはどういう構造</p>
-------	---

<p>をしているのでしょうか。細かく分析します。</p> <p>第9回 清韓宗属関係と日本1 清韓宗属関係</p> <p>◆19世紀後半の北東アジアの歴史の最大の急所は華夷秩序で説明される中国(清)と朝鮮との関係のありかたをどう理解するのかにありました。果たしてどうなっていたのでしょうか。</p> <p>第10回 清韓宗属関係と日本2 朝鮮の「近代化」と日本</p> <p>◆明治政府は「文明開化」・「富国強兵・殖産興業」を謳って「近代化」を進めます。そのような日本は朝鮮にどのように対応し、また朝鮮側はそれをどのように受け止めたのでしょうか。</p> <p>第11回 清韓宗属関係と日本3 明治前期の朝鮮政策</p> <p>◆とくに1880年代以降の日本側の対朝鮮政策の内容を検討します。</p> <p>第12回 清韓宗属関係と日本4 日清戦争</p> <p>◆1894年7月、日清戦争が勃発しますが、主な戦場はどこだったか覚えていますか。日本朝鮮半島交流史になぜ「日清」戦争があるのか、よく考えてみてください。</p> <p>第13回 併合への道1 日露戦争と保護国化</p> <p>◆日清戦争後、日本は大陸への進出／侵略を進めていきました。1904年の日露戦争はその過程の一端と言えるでしょう。このような状況の中で、日本は朝鮮(1897年からは大韓帝国)にどのように関わっていったのかを考察します。</p> <p>第14回 併合への道2 韓国併合とその後</p> <p>◆1910年8月22日、韓国併合条約が結ばれ、大韓帝国という一つの国が消えてしまいました。このことの意味をよく考えつ、条約締結の過程や、併合の後の日本と朝鮮との関わり合いについて検討します。</p> <p>第15回 まとめ</p>
--

テキスト	教科書は使用しないが、講義内容の理解を助け・深めるために、次項に挙げる書籍、ならびに授業中に紹介する書籍・刊行物を読み進めることを強く勧める。
参考文献	<p>吉野誠『征韓論と明治維新』明石書店、2002年。</p> <p>— 『東アジア史の中の日本と朝鮮』明石書店、2004年。</p> <p>岡本隆司『属国と自主のあいだ』名古屋大学出版会、2004年。</p> <p>— 『世界のなかの日清韓関係史』講談社選書メチエ、2008年。</p> <p>— 編著『宗主権の世界史』名古屋大学出版会、2014年。</p> <p>石田徹『近代移行期の日朝関係』溪水社、2013年。</p> <p>河宇胤(井上厚史訳)『朝鮮実学者の見た近世日本』ペリかん社、2001年。</p> <p>— (金両基監訳)『朝鮮王朝時代の世界観と日本認識』明石書店、2008年。</p> <p>高橋秀直『日清戦争への道』東京創元社、1995年。</p> <p>崔碩莞『日清戦争への道程』吉川弘文館、1997年。</p> <p>趙景達編『近代日朝関係史』有志舎、2012年。</p> <p>森山茂徳『近代日韓関係史研究』東京大学出版会、1987年。</p> <p>森山茂徳『日韓併合』吉川弘文館、1992年。</p> <p>など多数。その他、必要に応じてその都度紹介する。</p>
評価方法	<p>原則として、平常点20%＋期末試験80%とする。</p> <p>出席に関しては学則に準ずる(15回中、6回以上の欠席で期末試験受験資格を失う。授業登録期間中に行われる回も含まれるので注意)。場合によっては、理解度確認の小テストを行うこともあるが、この場合、小テストの結果は評価に反映させない。</p>
その他	<p><<履修上の注意>></p> <p>講義中のスマホ・携帯電話の使用・離席(体調不良等除く)・飲食・私語はしないこと。</p> <p>スマホで板書を撮影してはならない。</p> <p>本講義の進め方などを説明するので、初回の講義は必ず出席すること。</p> <p>大学の講義は毎回の講義を「聞くだけ」で理解できるものではない。受講者各自の自発的取り組みを期待する。</p> <p>※1</p> <p>※2</p>